様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　　６ 年　　５ 月 ２８ 日現在

機関番号：１１１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ０２６０５

研究課題名（和文）養護教諭志望学生と現職養護教諭の共同学習による救急処置能力向上プログラムの構築

研究課題名（英文）The Puroguramu of First aid of Coorerative Learning of Yogo teacher and University student

研究代表者
小林　央美（Hiromi, Kobayashi）

弘前大学・教育学部・教授

研究者番号：００４１９２１９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：学校における養護教諭の行う比較的軽微な救急処置活動のあり方について、現職養護教諭と養護教諭志望学生による共同学習を行いその成果を明らかにした。結果、養護教諭志望学生は学内での学びにおける救急処置過程について、症例に照らした具体的な気づきを得、学生なりの養護教諭観の問い直しがみられた。現職養護教諭は学生の基本的で素朴な疑問に答える学習過程を通して、救急処置における根拠を持った暗黙知への気づきと省察の深まりが認められた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
学校における養護教諭の行う救急処置は、救急救命を必要とする緊急性の高いものから、比較的軽微な対応まで広範囲におよび、その症例は軽微なものが多い。これまでの研究の多くは緊急性の高い症例についてのものであり、学校における養護教諭特有の軽微な救急処置に関する研究は少なかった。本研究で対象とした軽微な症例への対応のあり方や考えについての研究は、養護教諭の救急処置の本質を明らかにすることにおいて意義深いものである。その結果をさらに養護教諭養成の教育内容に反映させたり、養護教諭の養護の本質に照らした救急処置活動のあり方への追究につながる研究といえる。

研究成果の概要（英文）：A Study of Slight First aid of Yogo teacher in School from Cooperative Learning of Yogo Teacher and University student. Yogo teacher made think more reflection of first aid.University student made think more reflection of Yogo teacher philosophy.

研究分野：養護学

キーワード：養護教諭　救急処置

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　C－１９，F－１９－１，Z－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

（１）学校における養護教諭の特性を活かした救急処置能力向上の必要性

学校における救急処置は，救急車要請を必要とする緊急度の高い症例から簡単な処置等で教室復帰が可能な軽微な症例までその範囲は広い。その実態は，来室者のほぼ 90%以上が外科・内科的いずれにおいても軽微な症例である。しかし，緊急度の高い症例への救急処置能力は重要であり，これまでに多くの研究がなされ，判例分析をもとにした養護教諭の救急処置の役割やアセスメント能力，ヒヤリ・ハット事例の分析等で明らかにされている。

一方，養護教諭の救急処置の対応・指導過程は，①アセスメント－②判断－③処置－④保健指導－⑤記録・評価の５段階が示されており，医学的・教育的双方のアプローチを含んでいる。これまでの研究は，緊急度が高い症例であることから①～②に重点が置かれたものがほとんどであった。本研究では学校で行う養護教諭の救急処置の特性を活かした③処置，④保健指導，⑤記録と評価の指導過程にも着目した救急処置能力向上プログラムの開発を行う。また，教科保健での学びと保健室での個別の保健指導との連携・協力の推進に留意し，③処置や④保健指導の内容・方法を明らかにし，救急処置能力向上に向けたプログラムに取り入れる。研究により，これら一連の養護教諭の特性を活かした救急処置能力の向上に向けた取り組みは喫緊の課題である。

（２）教職全体を通じて学び続ける養護教諭の養成とキャリアステージに応じた能力向上

中教審答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い，高め合う教員養成コミュニティの構築に向けて～」(2015)では，教職生活全体を通じた学び続ける教員の育成が重要であると言われている。本研究におけるプログラム開発では，①養成段階と現職の研修の両段階を連動させた実践事例を軸とした学習内容の構築と②養護教諭志望学生（以下，学生と記す）と現職の養護教諭（以下，現職と記す）による共同的な学びを通した，救急処置能力向上とミドルリーダーとしての力量形成を鑑みたプログラムを開発・実施・検証するものであり，現代的な教員養成・育成の課題への取り組みでもある。

２．研究の目的

本研究は，学生と現職の共同学習による有効な救急処置能力向上プログラムの構築とその検証を目的としている。

学術的独自性及び創造性としては３点ある。１つ目は，プログラム構築にあたり学校救急処置の緊急度の高い症例だけではなく軽微な症例も対象としており，これまで明らかにされてこなかった学校救急処置の医学的・教育的アプローチの双方を視点においたプログラムを構築し実証的に検証することである。

２つ目として，プログラムの展開では，①学生と現職による共同学習と②ロールプレイやグループ討議といったアクティブラーニングにより「振り返り」と「対応とその根拠」の言語化を図ることである。この①②の学び方を通して教師の専門性と言える「省察力」を育てることができ，その立証により汎化できる学習形態となる。

３つ目として教育実践としての学校救急処置を明らかにすることである。教育実践の特徴として，対象への働きかけを通して対象を認識したり，働きかける自分の行為を認識したりする，行為と認識の相互作用の過程であり，子供と養護教諭との相互に深め合う関係を生み出すことが養護実践の根幹と言われている。学校救急処置の 90%以上を占める軽微な症状への対応における子供と養護教諭の相互作用の過程での教育的意義を解明しプログラム開発をすることは，養護教諭の実践の原理を追究することとなる。

３．研究の方法

救急処置能力向上を目指した学生と現職の共同学習によるプログラムを検討し，その実施・評価により，プログラムの教育効果と共同学習による教育効果を明らかにする。そのため，まず，最初に学生と現職の共同学習における学習内容の根幹となる現職の「振り返り」と「その対応の語りと根拠の言語化」の実態を把握するため，（１）**『現職養護教諭による救急処置実践の振り返りを中心とした研修による効果』**を明らかにした。

その後，暫定版の学習プログラムを構築し，順次，学生と現職の共同学習により，当初の研究目的である「学生と現職の共同学習による有効な救急処置能力向上プログラムの構築とその検証」を進める予定であった。本研究では，研究内容が救急処置ということもあり，ロールプレイと討議等を取り入れたアクティブラーニングによる対面学習での検証が必要であった。

しかし，新型コロナウィルス感染症の蔓延により対面による学習会の開催が困難となったため，（２）**『学校における比較的軽微な救急処置のあり方～学生と現職によるオンラインでの共同学習による効果～』**において，オンライン研修での効果検証を行った。

（１）と（２）の間には，現職の学習グループを対象にオンライン研修で「省察による救急処置実践の言語化」の訓練を行い，（２）の実施に備えた。

なお，（２）の終了後，その成果をもとに，「養護教諭が行う救急処置活動～比較的軽微な内科的症状について～」を冊子にまとめ，小・中・高等学校・特別支援学校，計 468 校に頒布した。

（１）現職養護教諭による救急処置実践の振り返りを中心とした研修による効果

①【対象】教育学部の養成課程を卒業した現職の養護教諭で，経験年数 8 年目までの 12 名（経験年数の平均は，3,16±2,3）を対象とした。調査時期は 2018 年 8 月 11 日～12 日であった。

②【方法・内容】養護教諭として実践してきた救急処置の概要と実践に対する考え等を個人思考と討議による集団思考の段階を踏んで，振り返りを行った。その振り返りの前後で質問紙調査を実施し，自覚化された救急処置実践の根拠や学士課程での学びとの統合等に対する意識調査を行った。質問紙調査は，「とてもそう思うを 10 点」として，10 段階での意識調査と自由記述を併用した。

（２）学生と現職によるオンラインでの共同学習による効果

①【対象】現職２名（経験年数 21 年目／6 年目）と弘前大学教育学部学生９名の計 11 名を対象とした。調査期間は 2023 年 12 月 24 日～2024 年１月 8 日であった。

②【方法・内容】１回当たり 90 分で，計４回のオンライン研修を行った。研修内容は，養護教諭が日常的に行っている比較的軽微な救急処置の事例を軸に，簡単な語りの後，その語りを切り口に学生との質疑応答や意見交換を中心とした討議を行った。討議により保健室来室時点から事例を時系列で追い，養護教諭の対応とその根拠や考えを深めていくような形式とした。研修後に現職・学生それぞれに自由記述による質問紙調査を行った。

４．研究成果

（１）現職養護教諭による救急処置実践の振り返りを中心とした研修による効果

①現職が振り返りを行った事例は，理由がはっきりしない軽微な症状による頻回来室，軽微な救急処置時の保健指導事例などであった。研修への参加動機について「救急処置について学びたい・情報交換したい・自身の養護教諭観等を再確認したい・伸び悩みを感じているので学びたい」であった。経験年数別にみると，１～３年目までは一般的な知識や技術の習得と情報交換が動機となっており，４年目以上になると，自己の実践を振り返り，課題意識を持ち，その課題を自律的に解決したい欲求を自覚している様子がうかがえた。これは，自己の実践の言語化を行うモチベーションとなる。これらから，学生と現職の共同学習では，４年目以上の現職

をまじえて行うことの重要性が示唆された。
②研修の事後調査では,「養護教諭同士の討議と交流で安心感が生まれたが，9.03点」で最も高かった。振り返り（省察）に対する意識では,「討議による気づきが多かったが9.42点」,「討議とまとめで理解が深まったが8.92点」,「自己の実践を振り返ることができたのが8.75点」であった。この振り返り（省察）については，経験年数との正の相関が見られた。①の結果からも言えたが，共学における現職の参加者は，経験年数に配慮する必要があることになる。いわゆる専門職としての熟達化の過程からみると，経験年数が４年目頃の定型的熟達化（日々の仕事を自律的に実行できる段階）や５年目から10年目頃の適応的熟達化（状況に応じて過去の経験や獲得したスキルを活用できるようになる段階）以降の現職が研修のメンバーには必須である。これらの現職は，本人自身も，また，討議の参加者や学生にとっても，省察を深めるキーパーソンとなる可能性が高い。今回の参加者にはいなかったが，10 年目以降の創造的熟達化（事態の予測や状況の直感的な分析と判断により問題解決していく段階）の方は，救急処置の経験を分析し，振り返り，言語化できる段階であるので，現職の参加者として重要である。
③討議による省察の後，ロールプレイによる救急処置実習を行った。その研修内容と方法について問うと,「実技研修が学びになったが9.42点」,「実践的な救急処置の学びであったが9.17点」,「対応力形成の機会となったが8.83点」,「実践事例を軸に考察できたが8.75点」であった。実践事例を省察し，その後，それを活かしながら実際の対応をロールプレイで行うというプログラムの効果が明らかになった。さらに，詳細に回答をもとめると,「養護教諭目線の説明がいいが10.0点」,「学生時代よりも当時者意識が高く学べたが9.42点」,「救急処置経験と合わせて考察できたが9.33点」であった。
④実際の救急処置事例経験を入り口とし，その後の省察もロールプレイも一貫して経験事例を活用した研修であった。そのことについては,「先輩の経験談が役に立ったが9.58点」,「同輩や後輩の経験談が役になったが9.33点」であった。先輩とは経験年数を重ねた現職と捉えると，省察とその言語化ができるようになり，課題意識も明確になっている段階なので，経験年数の少ない現職にとって，経験知が納得知や理論知へと導かれたことが推察される。また，先輩が同輩や後輩の経験談が役に立ったということは，学びの中で，経験に内在する対応の意味や根拠を養護教諭の立場で共に明確にしていくプロセスを踏んだのではないかと考えられる。
⑤研修後の全体的な感想として,「頑張る気持ちが高まったが9.83点」,「自ら学ぼうと思ったが9.50点」,「養護教諭の仕事は素晴らしいと思ったが8.92点」,「養護教諭として自分を肯定できたが8.00点」であった。職としての養護教諭のすばらしさを再認識し，前向きな思いになったことがうかがえる。また,「自らの課題が見えたが9.08点」であり，よいところの振り返りだけでなく，改善点を見いだしていった様子がうかがえる。また,「自己の養護教諭観が明確になったが8.00点」であった。救急処置を取り上げているが，養護教諭の実践全体に還元できるような学びをしていることがうかがえ，他の分野にも汎化できるものと考える。以上，事例を軸とした討議とロールプレイによる研修は，一定の効果が見いだせた。

（２）学生と現職によるオンラインでの共同学習による効果

【学生の学び】
①救急処置過程における養護教諭の対応についての具体的な気づきと学内での学びとの統合
現職から「保健室への来室時間の意味，来室の様子とその判断の対応」を具体的に聞き，来室した瞬間の見立てを仮説として，多岐にわたる対応への気づきがあり，その考察では，学内での学びとの統合がなされ，学内での学びの基本的事項の重要性を再確認していた。

②養護活動の全体構造から救急処置を捉え，生徒理解を中心とすることへの気づき

現職から「校内連携での対応や具体的な生徒とのやり取り」を聞き，養護活動全体から救急処置を捉え連携することや，初期対応での仮説を生徒との双方向でのやり取りの中で確認したり修正していく対応から，生徒理解を中心として救急処置が展開されていることへの気づきが見られた。

③学生なりの養護教諭観の問い直しと今後の課題への気づき

現職から「一つ一つの対応における意味や養護教諭としての考え」を聞き，学部の専門科目の授業で学生討論の中心となる「子どもの主体性への働きかけやニーズの共有化」といった学びの問い直し，さらに，今後何を学ぶのかを具体的に描くことができていた。またその内容は方法論を求める学生の思考を原理や哲学的事項を求めるという高次へ引き上げる変化がみられた。

④大学教育での学びの意義と卒後の現場での経験からの学びの連動性への気づき

学生の記述に，「今学んでいる救急処置のマニュアルだけを求めるのではなく，目の前の子どもを知り，対話し，他教員とも密にコミュニケーションを取りながら様々な選択の分岐を吟味していけるようになりたい」とあった。学内での学びと現場での実践での省察を連動させ，学び続けていくことの重要性について，学生なりの気づきがあったと推察する。

【養護教諭の学び】

①学生からの素朴な質問による省察への触発と深まり

養護教諭同士の研修ではあまり注視されないような学生の素朴で基本的な質問によりに触発され，スモールステップで丁寧に救急処置対応を振り返り言語化するプロセスが生じ，省察が深まり，養護教諭自身の養護教諭観が揺さぶられる様子がうかがえた。

②根拠をもった暗黙知による対応を言語化し自覚化する過程の学び

現職は，根拠をもった対応を暗黙知で行っていたことを言語化することで自分自身に問う場面が生じ，その場面で，現職自身が自己と向き合い誠実に考えて学生に対応していた。その現職の考え続ける姿勢に，学生は，学内の学びの後，教育現場で実践知として深めていくことの重要性を教えられたようで，キャリア形成に向け学び続けることの意味への気づきがあった。現職がミドルリーダーの役割を果たし導いたことがうかがえる。

③学生の触発によるマンネリ化への自己への警鐘

日常の救急処置対応の中でマンネリ化に陥りそうな事例を取り上げた省察で，現職はあらためて，軽微な救急処置対応の意味を深め，マンネリ化への自己への警鐘を促す場面があった。

このように，現職の経験した救急処置事例を軸として，学生は学内における理論的な学びと実践を往還させて実践的思考力と実践力を，現職は自己の実践を根拠をもって行っていることについて理論的に省察することを通して実践力と省察力を学ぶことにおいて，双方の学びの深化がみられた。また，共同学習により，学生はロールモデルを得，現職は若手養護教諭に対するリーダー的役割としての力量形成を行うことにもつながったと推察する。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 小林央美	４．巻 131
２．論文標題 学校における養護教論の行う比較的軽微な救急処置対応のあり方　第１報　現職養護教論と養護教論志望学生の共同学習による効果	５．発行年 2024年
３．雑誌名 弘前大学教育学部研究紀要	６．最初と最後の頁 209-213
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 小林央美、新谷ますみ
２．発表標題 現職養護教論に対する卒後教育の試みとその課題
３．学会等名 日本学校保健学会第65回学術集会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関